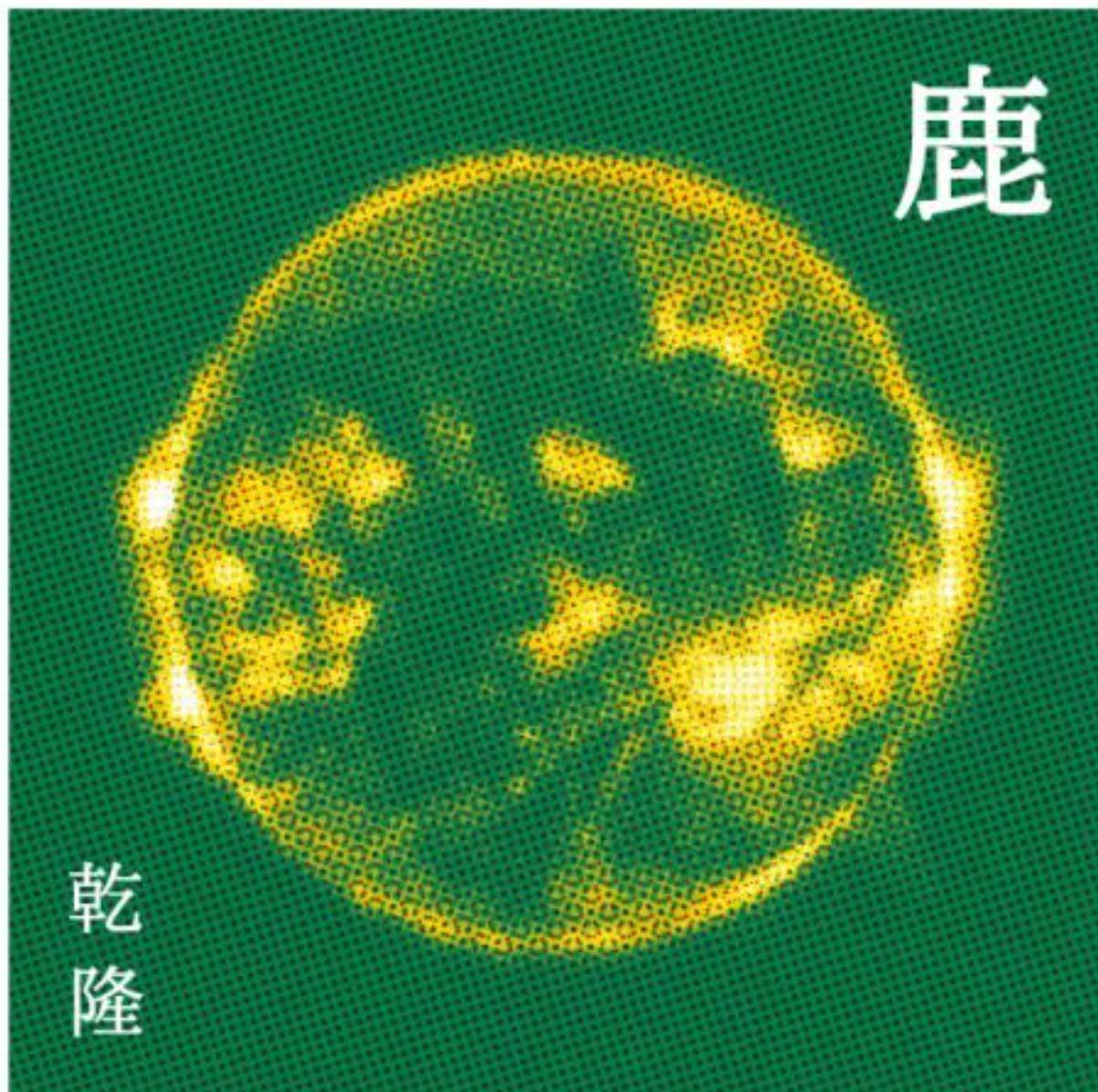

馬

鹿



乾
隆

登場人物

藤井 陽光（ふじい ひかり・男）

中山 量士（なかやま りょうじ・男）

蜂谷 統一郎（はちや とういちろう・男）

蜂谷 香織（はちや かおり・女）

竹田 祥子（たけだ しょうこ・女）

濱 進（はま すすむ・男）

長谷 理文（はせ まさふみ・男）

長谷 ゆり (はせ ゆり・女)

宇内 守 (うだい まもる・男)

赤ん坊 (女)

灼熱の礫砂漠。

眩しすぎる風景の中で、スコップを握り締めて、六人の男達（藤井陽光、蜂谷統一郎、中山量士、濱進、宇内守、長谷理文）が地面に穴を掘っている。

巨大な太陽が彼らの頭の上にある。

火照る顔。身体の内側から噴き出す汗が皮膚の表面を濡らし、顎のラインを伝って落ちる。砂地にしたたった汗水は地面にしみ込むまでもなくすぐさま蒸発する。

穴掘りをする彼らの脇に、彼らそれぞれの大小様々な荷物が寄せられてある。

藤井、穴を掘りながら、ずっと俯いていた顔を上げる。お揃いではなくばらばらの作業着を着た六人。同じような恰好で懸命に一つの穴を掘っている姿がまるで分身の術のようで、藤井はなんだか可笑しくなって、笑う。

藤井「あははは」

五人の男は一斉に顔を上げる。

宇内 「何急に笑ってんの？」

中山 「狂ったんじゃないか？」

濱 「大丈夫？」

蜂谷 「暑さでおかしくなったんだよ」

長谷 「休ませてあげたほうがいいんじゃない？」

藤井は少し照れて笑う。

藤井 「いや、大丈夫。なんか、面白いなって思ってる」

全員、掘る作業を続行する。ひとときも動作を休めずに会話。

宇内 「別にいま面白いこととくになかったけど」

濱 「この穴掘りってさ、何のための穴なのかな？ 出来上がった穴は何に使うつもりなんだろう？」

蜂谷 「『穴を掘れ』って言われたら、掘る。労働するのは、顔も名前も失わなきゃいけないんだ。仕事が

済めば金と一緒に顔と名前を返してもらえる。俺達はいま、何も考えずに穴を掘ればいい」

宇内 「金欲しいな。俺、いまの彼女と結婚考えてんだ。大金持ちになれたらさ、夢は彼女と大邸宅に住むことなんだ」

濱 「彼女いくつ？」

宇内 「俺より二つ下」

中山 「お前が何才だよ」

宇内 「俺？ 二十三」

濱 「二十三才」

宇内 「俺、いままで九人つき合ったの。十五才のとき家出、というか実家から抜け出して、けっこう年上の女のことか泊めてもらったり、棲みついたりして」

濱 「ヒモ？」

宇内 「いさそうろう。そんでき、いろんな恋愛してさ、女の家を転々としてさ。あ、でも遊びじゃないよ？

全部本気。その時その時で、俺はこの人のために生まれてきた！ とか思うわけ」

中山 「惚れっぼいだけなんじゃないの」

宇内 「そんできいまの彼女に出会ったんだけど、初めて年下とつき合って、パアッて何か分かったんだ。

自分はいままで年上に甘えていただけだって。いままでの恋なんかじゃない！ ってさ」

濱 「一番年が離れてたのは何才の女？」

長谷 「かーペツ！」

蜂谷 「汚ねえな！ タン吐くなよ！」

長谷 「すみません」

宇内 「（考えて）十七才違い」

濱 「十七！」

宇内 「俺が十六ん時につき合つてて、当時年齢倍以上だった。昔のことはもうどうだっていいの！ 今の彼女と結婚するんだよ！ 大邸宅で暮らすんだ！」

藤井 「それで日雇い労働？ 日雇い労働で大邸宅？」

宇内 「んー、まあね」

中山 「道のりは長いな」

宇内 「（濱に）何人につき合った？」

濱 「三人」

宇内 「少ない？」

濱 「ふつうでしょ。一人一人が長いし。俺は、もうめっちゃくちゃふつうに生きてきたわけ。事件にも巻き込まれず、ふつうにのほほんとき。だから家出とかヒモとか想像範囲を超えてるよ」

長谷 「……あ、暑い」

藤井 「なんか汗の出方が尋常じゃない」

宇内 「でも、俺、ふつうの人生だよ？」

蜂谷 「（掘りながら見渡し）写真で見ると砂漠ってきれいなのに、実際に砂漠に立って見ると、全然きれいじゃないな」

宇内 「きれいきれいじゃないの問題じゃなく、汗で目開けらんないし」

藤井 「ハハ、たしかに」

蜂谷 「みんな俺みたいにタオル頭に巻けばいいよ」

濱 「俺やろっかな」

濱、言いながら荷物のほうへ行き、鞆を探る。タオルを出すついでにペットボトルの水をほんの少しだけ飲む。

濱 「ぬるい！」

宇内 「（うらめしそうに）太陽ってなんで燃えてんだろう」

濱 「そう思う！ こんな暑くなくていいのに」

中山 「太陽に人間がいるって話、知ってる？」

藤井 「え？」

中山 「太陽黒点の中に湖があつて、そこに人間が存在するっていう説があるんだ」

藤井 「へー」

濱 「一瞬で燃えかすになるよ」

中山 「そう、その一瞬のあいだに人間が生まれて成長して年老いて死ぬんだって。時間軸が地球と極端に違って、超光速で歴史がどんどん流れて、だから太陽黒点は一ヶ月程度で消えたり生まれたりするんだって」

濱 「表面温度は六〇〇〇度。黒点でも四〇〇〇度。一瞬だって生存不可能だよ」

宇内 「もう太陽の話やめない？」

藤井 「暑苦しいね」

中山 「（食いさがつて）温度計もって測った？」

濱 「（面倒臭そうに）は？」

中山 「（俯き穴を掘りながら呟くように）信じてることなんか、しょせん全部仮説なんだよ」

蜂谷 「そっちじゃなくてこっちだよ。掘る場所」

宇内 「穴広げようかと思つて」

蜂谷 「なんで広げんだよ」

宇内 「広げちゃダメ？」

蜂谷 「協調性だよ。みんなここ掘ってんだから」

長谷 「かーペツ！」

中山 「タン吐くなよ」

長谷 「すみません」

蜂谷 「(宇内に) お前！ 砂もつと遠くに捨てろよ。穴掘ってんのにそれじゃ意味ねえだろ！」

宇内 「え、俺？」

濱 「お前だよ」

藤井 「砂は遠くに捨てないと、穴が深くなるほど、砂を捨てるのに苦労するからだよ」

宇内 「え、意味わかんない」

中山 「とにかく遠くに捨てて」

宇内 「(スコップに勢いづけ、砂を遠くに捨てる。)」

中山 「そっち俺らの荷物あるだろ？」

宇内 「暑すぎて頭回らないんだよ。もともとから頭わるいし」

中山 「頭悪いのが迷惑なんだよ」

宇内 「(また掘りながら) みんなけっこうきてるね」

濱 「俺、ぜんぜん平気」

試し読みしていただけるのはここまでです。

この続きは商品をご購入の上ご覧下さい。

馬鹿（おためしサンプル）

2018年11月4日 初版発行

著 者 乾隆 © 2018年

発行者 石村寛之

発行所 有限会社レトロインク

〒181-0001 東京都三鷹市井の頭4-26-7

電話 0422-24-9529
